

小論

「確率論」と

Up Down 方式経営分析の接点

確率論（数学）では、未来に起こるすべてのパターン（標本空間）とその数を知ることが出来る。その数は算式を使った計算で知ることが出来る。また、有名な「パスカルの三角形」では、一見しただけでその数を知ることができる。

Up Down 方式経営分析は二項目同時増減分析であり、2個のコイン投げに酷似する。ギャンブルの理論化という経歴を持つ「確率論」ではあるが、確率論の未来予測（当たり予測）と Up Down 方式経営分析の未来予測とに類似点がある。共に前もって結果としてのパターンのすべてを知ることが出来ると言う点だ。

コイン投げやサイコロ投げ、さらにルーレット、馬券の購入まで、この確率論は人の意志や、条件を排除し、考えられるすべての着地点を予想として提示している。1個のコインを永遠に投げ続ければ表が50%、裏が50%の割合で出ると言っているのである。ただし、コイン投げの現場では表が5回10回と続くこともあると言うランダム性（無原則性）も同時に持ち合わせている。この点では Up Down 方式経営分析と確率論は大きく違う。

Up Down 方式経営分析は、「収益(売上)」と「利益」という2つの項目で、コイン投げの表（増）と裏（減）の組合せのように4パターンの出方を問題とする。コイン投げではその都度のどちらかお出すという意味意図は通用しない。だからギャンブルなのだが、「運」や「偶然」を楽しむこととなる。一方、経営では時としては「運」や「偶然」もあるが、原則「企業努力や経営には企業の景気、社会の景気などに対する先見力」などを使いながら結果（パターン）を目標とし、そして結果を分析評価する。

ところで、パターンの数について若干触れておく。1種類のコインを投げると、裏と表の2つの結果（パターン）しかない。2種類のコインを同時に投げると、「表表・表裏・裏表・裏裏」というように、4つの結果（パターン）が有る。3種類のコインを同時に投げると8つの結果（パターン）がある。種類の違う10個のコイン投げでは、1024通りのパターンが存在する。（パスカルの三角形を参考にされたい）「2分の1」「4分の1」「8分の1」「1024分の1」の確率でその都度は“不規則に”出現する。

経営では努力や先見性が支配する。経営でも運が影響する場合もある、しかしギャンブルのように運だけではないということだ。運の果たす役割は小さい。

確率論から学ぶべきは「4つのパターンの存在」だ。経営もそのパターンからは逃れられない。確率論のように確率はバラバラだが、必ずいずれかのパターンに帰着する。

Up Down 方式経営分析は、確率論と違って「結果としての4つのパターン」は会社の動向や景気を表わすものとなる。

表表つまり増加増加を成長と定義すれば会社の栄枯盛衰の「体温計」に成り得るのだ。